

国語辞典と四字漢語  
— 辞書にのる語とのらない語 —

**Japanese Dictionary and Four Character  
Sino-Japanese Words:**

The Words that Appear in the Dictionary and the Words  
that Do not Appear in the Dictionary

中 川 秀 太  
NAKAGAWA Shuta

キーワード：国語辞典，四字漢語，見出し語，二字漢語，意味

1. はじめに

国語辞典にのる漢語の語彙を眺めた場合、「芸」「社」などの一字漢語や「運転」「会社」などの二字漢語は、辞書の見出し語として一般的なものであり、普段よく使われるものについては、その多くを辞書に見いだすことができる。これに対して、「反対方向」「有名女優」などの四字漢語の場合、日常的に使われることはあっても辞書にはのっていない、という語が少なくない。なぜなら、辞書のスペースに余裕がないという物理的な理由が大きいのだが、そこには「これらの意味が説明するまでもないから」(島村ほか(2004,p.53))という言語的な理由も存在する。「反対方向」「有名女優」は、それぞれ「反対」「方向」「有名」「女優」の個々の意味を理解していれば、全体の意味を理解するのは、日本語を母語とする人であれば、それほどむずかしくないと、ひとまずいえる。しかし、ある四字漢語が一般に用いられる形であるかどうかは、日本人でも迷う部分であるため、「これこれの形がありうる、ということを示す」(島村ほか(2004,p.53))というように、用例として四字漢語の形を示すのは、有用な方法である<sup>1</sup>。一方、「四面楚歌」「呉越同舟」のような故事成語の類や、「運動中枢」「基礎体温」などやや専門的な語で、一般にも使われうるもの、あるいは「携帯電話」「専業主婦」など日常的によく使われ、単なる二字漢語の組み合わせ以上の意味・ニュアンスを伴うようなものについては、四字漢語を見出し語としてたてる必要がでてくる。たとえば、『学研現代新国語辞典 改訂第5版』は、約75,600語を収録すると凡例で説明するが、筆者の調査では、「神出鬼没」のように四字漢語全体で見出し語のものと、「貿易摩擦」のように二字漢語(ここでは「貿易」)の子見出しとして示される四字漢語とをあわせて、計1,702語(全体の約2%)が確認できている。

四字漢語と国語辞典について、以上のことを前提とした上で、本稿では、辞書にのる四

字漢語とのらない四字漢語の性質について、国語辞典、新語辞典、文芸雑誌の三つの資料にあらわれた四字漢語を用いて、その要因を考えることにする。新語辞典については、『現代用語の基礎知識 2013』の索引を用いて、1,086 (異なり語数) の四字漢語を抜き出した。新語辞典は、辞書の形式をもつと同時に、時事的な用語も多く含むものであり、国語辞典と雑誌との中間的な性格をもつ用例資料と考えて利用したものである。雑誌は、2013年発行の文芸雑誌『新潮』(110-8, 新潮社), 『文学界』(67-8, 文藝春秋), 『文藝』(52-3, 河出書房新社), 『ドラマ』(35-8, 映人社), 『SF マガジン』(54-8, 早川書房), 『群像』(68-8, 講談社) を用いて、2,328 (異なり語数) の四字漢語を抽出した。辞書類に加えて、雑誌を用いるのは、先述のように、四字漢語は国語辞典にのっていない場合が多く、その実態をとらえるには、日本語で書かれた実際の資料にあたって、多くの用例を抽出する必要があるためである。

なお、前述のように、二字漢語は、国語辞典に立項されるものが多いのに対し、「新会社」「公園内」など接辞的な一字漢語を含む三字漢語も国語辞典にはのりにくい。「新」や「内」など一字漢語の意味・用法がわかっているならば、三字漢語全体の意味は、容易に引き出されるところの考え方があるためであるが、その分、三字漢語の要素となる接辞的な一字漢語については、詳細な分析が求められる。それゆえ、筆者は三字漢語、四字漢語の実際の使用例を大量に集めて、それらを構成する一字漢語や二字漢語の造語機能や意味・用法について記述する作業を進めており、それによって現代語の三字漢語や四字漢語についての理解を深められるようにすることを目的としている。そして、このような目的の一部として、そもそも意味を説明する必要がある四字漢語、そうでない四字漢語というのは、どのような語かという点を明らかにする必要があると考え、ここでの検討課題とする次第である。

## 2. 語の構造的な面からの観察

### 2.1 四字漢語の語構成

ここでは、四字漢語の構造的な側面について、3種の資料を比較する。まず、四字漢語の構造は、野村(1987)を参考にして考えると、

- A型 □□+□□：緊急-事態 予備-知識 民間-企業
- B型 (□□+□)+□：映画-化-権 入場-者-数 不可-知-論
- C型 (□+□□)+□：低-脂肪-乳 富-栄養-化 無-国籍-者
- D型 □+(□□+□)：軽-自動-車 重-機関-銃 名-編集-長
- E型 □+(□+□□)：極-超-短波 準-禁-治産 人-代-名詞
- F型 □・□・□・□：花・鳥・風・月 春・夏・秋・冬 都・道・府・県
- G型 (□・□)+□□／((□・□)+□)+□：中-長-距離 正-副-議長／農-畜-産-品 幼-少-年-期

といった種類にわけられる。新聞を資料として四字漢語を分析した野村(1975)では、ここでA型と記した構造に所属する語がもっとも多く、異なりで3,224語(91.2%)にのぼることが報告されている。これらを念頭においた上で、3資料における語構成別の出現状況をまとめると、表1のようになる。

表1 各資料における四字漢語の異なり語数と割合（語構成別）

	国語辞典	新語辞典	文芸雑誌
A型	1,646 (96.7%)	1,024 (94.3%)	2,173 (93.3%)
B型	7 (0.4%)	19 (1.7%)	82 (3.5%)
C型	14 (0.8%)	22 (2%)	34 (1.5%)
D型	21 (1.2%)	14 (1.3%)	27 (1.2%)
E型	3 (0.2%)	7 (0.6%)	0 (0%)
F型	8 (0.5%)	0 (0%)	8 (0.3%)
G型	3 (0.2%)	0 (0%)	4 (0.2%)
計	1,702 (100%)	1,086 (100%)	2,328 (100%)

表からは、新聞以外の資料においても、A型がほかの構造と比べて、突出して所属語数が多いことがわかる。ただし細かく見ると、「国語辞典・新語辞典・文芸雑誌・新聞」の順番で、A型の割合が高い点に注意される。新聞あるいは文芸雑誌では、「社会派的」や「被差別者」など、接辞的な一字漢語を複数含んだ四字漢語が出現するが、辞書には「社会派」や「被差別」など、接辞的な一字漢語を一つ含む三字漢語自体が登録されにくい。先述したように、辞書に立項して意味を説明するまでもないと判断されるためである。したがって、B型やC型は、実際の文章には出現するものの、辞書には「不可知論」「育成者権」など、定義する必要がある、比較的少数の語に限って登録されることになるので、A型の割合が新聞や文芸作品よりも高い結果になる。F型については、文芸雑誌に8例出現しているが、「士農工商」「東西南北」など、すべて国語辞典にのっている語であり、新しい形のものは見られない。また、新語辞典では、F型の語自体が出現していない。断定的なことをいうには、より多くの例で確認する必要があるが、すでに国語辞典にある「花鳥風月」「起承転結」などを日常的に用いることはあっても、そのような、四字それぞれが独立した意味をもつ四字漢語を新しくつくるのは、現代では容易なことではなく、また、それが必要な機会もないのだろうと思われる。

## 2.2 四字漢語の意味的な構造

「王位継承」は、「王位」と「継承」が、「王位を継承する」という補足関係（格関係）にあるのに対して、「一進一退」は「一進」と「一退」とが反対の意味を表す対立関係にある、というように、2.1において、A型とした四字漢語については、前後の二字漢語同士の意味的な関係が問題となる。野村（1987）では、二字漢語と二字漢語との間に想定される意味の関係として、以下の五つを設定する。修飾関係1は連用修飾、修飾関係2は連体修飾の関係であることを示す。

- ・補足関係：栄養豊富 素行不良 当選確実 実現可能 動脈硬化 海外公演
- ・修飾関係1：特別参加 完全消毒 徹夜交渉 徐行運転 一時停止 一斉調査
- ・修飾関係2：高級官僚 重要案件 勤労意欲 消費電力 野球選手 外国映画
- ・並列関係：党利党略 内憂外患 不眠不休 自由自在 東奔西走 自給自足
- ・対立関係：竜頭蛇尾 寸善尺魔 西高東低 大同小異 男尊女卑 優勝劣敗

本稿の資料における四字漢語を、これら五つの種類に分類するが、ここでは文芸雑誌中の四字漢語を、辞書に見出し語があるものとないものとにわけ、前者を「見出し語」、後

者を「非見出し語」として表示する。判定に用いたのは、『日本国語大辞典 第2版』『広辞苑 第6版』『大辞林 第3版』『大辞泉 第2版』である。新語辞典は、2.1と同様である。以上にもとづき、各資料のA型の語を分類すると、以下のようになる。

表2 雑誌(見出し語・非見出し語とに区別)と新語辞典に出現した四字漢語の異なり語数と割合(二字漢語の意味的關係別)

	見出し語	非見出し語	新語辞典
補足関係	105 (19.7%)	367 (22.2%)	214 (20.9%)
修飾関係1	34 (6.4%)	108 (6.6%)	71 (6.9%)
修飾関係2	303 (56.8%)	1,123 (68.6%)	730 (71.3%)
並列関係	81 (15.2%)	37 (2.3%)	3 (0.3%)
対立関係	10 (1.9%)	5 (0.3%)	6 (0.6%)
計	533 (100%)	1,637 (100%)	1,024 (100%)

補足関係や修飾関係については、それほど大きな差が、グループごとの四字漢語の間に見られない。しかしながら、並列関係や対立関係の語については、故事成語的なものが多く、非見出し語の四字漢語や新語辞典の四字漢語にしめる割合は低い。ただし、並列関係について、表2の「非見出し語」の用例には「英雄賢者」「古語綺語」「警戒警備(する)」「詳細丁寧(な)」「単純素朴(な)」「普通一般(には)」のような形が、対立関係については、「成功失敗」「盛夏厳冬」「前肢後肢」などの形が散見される。並列関係の語は、強調などの理由から臨時的に用いられており、一語としてのまとまりは低い類である。この点は、「時代時代」「部分部分」「要所要所」のように、同じ二字漢語を繰り返したものについてもいえることである(この3語は表2では除外している)。本稿では、四つの一字漢語から構成されるものを、すべて四字漢語として処理しているので、これらもその範囲に含まれるが、認定のしかたによっては、二字漢語同士の独立性が高いと考え、これらを非四字漢語と見なす立場もありうる。また、「成功失敗」「前肢後肢」などの対立関係の語は、「成功と失敗」「前肢と後肢」のように「と」を用いた形のほうが一般的な言い方である。

### 2.3 二字漢語の造語機能と意味的な関係

たとえば、「以外」という二字漢語は、「関係者以外」「苦痛以外」のような使い方をする「造語成分」として『三省堂国語辞典 第7版』に立項される。このような、いくつもの語の構成要素として用いられる二字漢語については、その点についての記述と用例が示してあれば、四字漢語(五字などの場合も含めて)の形をいちいち辞書の見出しにたてなくともよいという考え方ができる。並列関係と対義関係については、二字漢語同士が対等の関係で結合しているので、どちらかを造語成分的な要素として見ることはできない。それゆえ、ここでは、補足関係、修飾関係の中身をより細分化した形で、見出し語と非見出し語の四字漢語を比較することにする。

以下では、記号として、N(名詞)、V(サ変動詞語幹の二字漢語)、A(形容動詞として用いられる二字漢語)、M(副詞として用いられる二字漢語)を用いる。先に見出し語・非見出し語として示した四字漢語の前要素あるいは後要素として、二つ以上の語において用いられている二字漢語について、意味的な関係ごとに分類すると、以下のようになる。

表3 複数の語で構成要素となる二字漢語を含んでいる四字漢語の意味的な構造

	見出し語		非見出し語	
	前の二字(語例)	後の二字(語例)	前の二字(語例)	後の二字(語例)
補足関係				
N+A	0	0	0	5(意味不明 体調不良)
V+A	0	0	0	2(使用可能 解読不能)
N+V	4(宗教改革 保守合同)	2(気分転換 地熱発電)	24(市場拡大 連載開始)	43(知識不足 作家志望)
修飾関係1				
A+V	0	0	10(過剰摂取 正式決定)	1(安全運転)
V+V	1(強制収容)	0	1(共同研究)	1(徐行運転)
M+V	1(同時進行)	0	3(同時収録 臨時開封)	1(原則公開)
修飾関係2				
A+N	3(特殊教育 必須科目)	0	13(巨大企業 有力企業)	4(必要事項 有名女優)
V+N	8(合成写真 冷凍食品)	18(引用箇所 展示会場)	40(火山活動 芸術運動)	48(研究結果 製作主任)
N+N	28(学校行事 文学雑誌)	35(金融機関 国民学校)	106(上海都市 女性軍人)	123(英語教師 温泉旅館)
計	45	55	197	223

複数の意味的な構造で出現する二字漢語については、該当する語数の多い構造で代表させた。ただし、「安定成長」(V+V)と「経済成長」(N+V)とが確認された「一成長」のように、該当語数に偏りのないものは表からは除外しておいた。

補足関係について、Vが要素となっている場合は、「宗教改革」「地熱発電」など、四字漢語が個別的・具体的な意味を表しうるため、国語辞典にのるような語が多く見られるのに対して、Aを含む四字漢語の場合、「体調不良→体調が不良」「使用可能→使用することが可能」のように、句にした場合と意味にほぼかわりがなく、辞書にのせる必要のある語が見だしにくいという差異がある。

修飾関係1では、「正式」「共同」「同時」など、後にくるVの表す動作を修飾するもので、いくつもの四字漢語に用いられるものがある。たとえば「正式」は「正式—」の語をつくりやすいが、近い意味をもつ「本式」は、あまり合成語の要素として用いられないというように、前要素として合成語の要素になりやすい二字漢語については、辞書に記述があったほうが便利である。一方、修飾関係1で、後要素として使われることが多いVというのは、資料中には見られなかった。もっとも、これは、もっと多くの用例で検討する必要がある。

### 3. 四字漢語の意味・用法の面からの観察

以下では、個々の四字漢語の意味的な性質を考慮しながら、見出し語になりやすいものとなりにくいものを考えていくが、扱うのは、量的にもっとも多いA型の四字漢語に限る。この場合、二字漢語と二字漢語とが結合して四字漢語になるが、要素としての二字漢語そのものが、辞書にのっていないようなものである場合がある。「空流調節」「星間会議」「聖的機能」「層現都市」などにおける下線部がこれにあたり、二字漢語自体について、臨時的なものに過ぎないのか、一般的に用いられるものなのかの検討が必要になる。また、「有

言実行」(不言実行), 「邦高洋低」(西高東低), 「卑種流離」(貴種流離〈譚〉)のように、四字漢語が既存の語(丸カッコ内の語)のもじりである場合、入れかえた部分の二字漢語および全体としての四字漢語は、通常、見出し語にはなりにくい。

それから、「当・同・本」など、連体詞的な一字漢語を含む以下のような四字漢語も、辞書にはのりにくい。

当一(当社指定) 同一(同書後半・前回同賞) 本一(本作全体・本誌読者)

二字漢語では、「当社」「同氏」「本学」などについて、「この会社。また、我が社」(『明鏡国語辞典 第2版』), 「その人」(『新明解国語辞典 第7版』), 「この大学。当大学」(『新選国語辞典 第9版』)と記されるように、連体詞的な「当一」「同一」「本一」の語で、よく使われたり、意味が特別であったりして見出し語に採用されているものも少なくない。しかし、「当社指定」「同書後半」など、四字漢語の形では、特別な意味を有することもなく、辞書にのりとしても、用例での提示にとどまる。

### 3.1 接尾辞的な二字漢語を含み、説明不要なケース

四字漢語の構成要素である二字漢語そのものは、国語辞典に記載されているようなものである場合、説明するまでもない四字漢語の典型例として、まず接辞的な性格をもつ二字漢語をとりあげる必要がある。島村ほか(2004)では、「新計画」「計画的」など、接辞的な一字漢語を含む三字漢語(派生語)については、辞書にのらないものが多いとしているが、同様の性質を二字漢語が有している場合、四字漢語を個別に登録するよりも、二字漢語の説明において、接辞的に使われる場合の意味・用法を詳しく記述したほうが効率的である。ただし、二字漢語の場合、一字漢語と異なり、名詞として自立用法をもつものが多く、どのようなものを接辞的としてよいかの判断がむずかしい。以下には、まず一般的な国語辞典において、「接尾語的」「造語成分」「名詞の下に付けて」などの記述が見られる二字漢語を例示する。

一以下(家畜以下) 一以外(家族以外・自宅以外) 一以上(安堵以上・想像以上)  
 一以前(近代以前) 一以来(事件以来・創刊以来) 一関係(家族関係・団員関係)  
 一自身(皇帝自身・作者自身) 一次第(脚本次第・教育次第) 一自体(質問自体・存在自体) 一前後(還暦前後) 一同士(貴族同士・姉妹同士) 一同様(家族同様・計画同様)

接尾辞的な二字漢語を構成要素にもつ四字漢語は、単独で見出し語になることは、一般的ではないという傾向がうかがえる。ただし、たとえば「自分」の強調表現として「自分自身」が辞書にのるなど、これらの二字漢語を含む四字漢語が辞書にのる可能性がまったくないというわけではなく、例外的な語も存在する。なお、辞書に「接尾辞的」などの記載はない語でも、以下のようなものは、多くの四字漢語を生み出しており、造語力がある。

一一色(戦争一色) 一格差(科学格差) 一合戦(取材合戦) 一気分(厭戦気分)  
 一規模(宇宙規模) 一経験(軍隊経験) 一主義(効率主義) 一人生(作家人生)  
 一物質(化学物質) 一方法(演出方法)

前にくる二字漢語の表す物事の位置や数量を規定する、次のような四字漢語も用例が多い。

・一各所(都内各所) 一周辺(基地周辺) 一全体(画面全体・公園全体) 一中央(画

面中央) 一表面(惑星表面) 一部分(基幹部分)

・——同(学生一同) 一数人(警官数人) 一全員(被告全員) 一全部(人間全部)

また、「読者」に対する「読者諸君」「読者諸兄」のように、敬意を添える目的から、いくつもの「一諸君」「一諸兄」の四字漢語が形成されている。

一旺盛(元氣旺盛) 一可能(使用可能・実現可能) 一特有(高山特有・組織特有)

一不能(採血不能) 一不明(原因不明)

四字漢語が形容動詞的に用いられる、これらの語の場合、二字漢語そのものは、「接尾語的」「造語成分」などの扱いを受けることがないようであるが、上記のような用法があることを用例によって示す辞書が見受けられる。

前部分については、

異常—(異常事態) 一斉—(一斉送信) 一般—(一般雑誌) 個別—(個別活動)

最終—(最終候補) 重要—(重要単語) 専門—(専門雑誌) 直接—(直接対話)

同時—(同時受賞) 特殊—(特殊能力) 有名—(有名作家) 有力—(有力企業)

臨時—(臨時閉店)

など、後部分のモノや動作を修飾する二字漢語に、多くの四字漢語の構成要素として用いられるものが見られる。ただし、いずれも自立的に用いられる語であり、「国際会議」の「国際」など、非自立的なものは、まれである。以上のように、さまざまな語の構成要素として用いられる二字漢語については、四字漢語全体が即座に理解できるようなものである場合が多いが、その分、二字漢語自体の記述としては、複合語の一部としての用法について、詳しい言及が求められる。たとえば、『明鏡』で、「さまざまな「主義」(コラム)」のような欄を設けているのは、その具体的な実践だといえる。

## 3.2 要説明の要因とそれを有さない四字漢語

### 3.2.1 ほかの語との関係など

以下では、資料中の四字漢語について、見出し語になっているものの性質を考察しながら、それをもとにして、見出し語として説明する必要のない四字漢語の性質についても考えていく。

#### 3.2.1.1 成句的。二字漢語の用法が限定的

意気消沈 意気投合 意気揚揚 孤軍奮闘 才気煥発 前代未聞 超常現象 品行方正 陽動作戦

それぞれの下線部において、たとえば「消沈」「方正」などは、単独で辞書に見出し語として記載されているものの、用例として「意気消沈」「品行方正」などが掲げてあり、二字漢語単独での用法が明示されていない場合が多い。これらは、四字漢語での使用が慣用的なものとして、辞書にはのりやすい。

#### 3.2.1.2 固有名に近い語。使用される二字漢語は一般語

たとえば、「玉音放送」は、「一九四五年(昭和二〇)八月一日、昭和天皇みづからの声でラジオを通じて全国民に戦争終結の詔書を放送したこと」(『大辞林 第3版』)のように、四字漢語全体としては、特定の年におこった一回性のできごととして記述されている

が、語を構成する二字漢語そのものは、「天皇の声」の意である「玉音」と「放送」からできており、一般語のような見かけをもつ四字漢語である。この点で「東京大学」「佐藤首相」など、地名・人名などを表す二字漢語が含まれる四字漢語と区別される。後者のような語は、四字漢語の収集段階において除外したが、前者については、構成要素が一般語である点を重視して、資料の範囲に含めてある。同様のものとしては、

学徒動員 教派神道 国民学校 宗教改革 集団就職 神社本庁 表現主義 文芸復興 保守合同

などがあげられる。たとえば、「保守合同」は、「保守政党が合同すること」というような一般的な意味で記載されているわけではなく、1955年に当時の自由党と日本民主党が合同して自由民主党をつくったという、歴史的なできごととして記述されている。したがって、もしも、21世紀の現在のことについて「保守合同」を使う場合には「平成の保守合同」の「平成の」など、1955年のものとの区別を示す表現をそえる必要がある。上記の語と比較して、「大名行列」「秩禄処分」「天孫降臨」「兵農分離」などの場合には、下線部の語をもとにして、歴史的な事柄を表す語だとの推測がたてやすい。以上のような百科語的な性質をもつ四字漢語は、特定の事柄を表すので、辞書に記載する場合には、用例としての掲出では不十分で、意味の説明が必ず必要になる。

### 3.1.1.3 専門的な語

それぞれの二字漢語は、単独で用いられることがあり、一般的なことばであっても、四字漢語としては、何らかの分野で使用される専門語である場合、二字漢語の意味の和よりも細かい説明が必要になる。厳密に言えば、先述の固有名詞的な語の中にも、専門的な内容を表すものが含まれるが、以下では、現代社会における事柄を示すのに用いられる語をとりあげ、歴史的なできごとなどを表す語は、対象外としておく。辞書のサイズによって、専門語の収録語数は異なるが、新聞や放送などを通して、一般にも知られるようになった語は、小型の辞書でも採録される。

暗黒舞踏 (舞踊) 炎色反応 (化学) 公正証書 (法律) 集散花序 (植物) 純粹持続 (哲学) 反対給付 (経済)

これらの場合、二字漢語の意味をもとにしただけでは、四字漢語全体の意味について、見当をつけるのも一般には困難であり、意味の透明性は低い。一方、次のような四字漢語は、ある程度、二字漢語の意味から、語全体の意味も推測できる。

気象衛星 (気象) 細胞分裂 (生物) 自己破産 (法律) 時代区分 (歴史) 司法試験 (法律) 心筋梗塞 (医療) 全体主義 (哲学)

これらの場合も、正確に語の意味を理解するには、辞書などの定義がよりどころとなる。「化学で研究対象とする物質」である「化学物質」に対して、「化学工業で合成される物質、あるいは人工の物質という意味で使われることがあるが、本来はそのような意味はない」(『広辞苑』)とされるように、二字漢語間に想定される意味的な関係の把握に、ずれが生じることもある。また、本来の意味と第二の意味とが、いずれも専門的な意味で用いられる場合には、まぎらわしさなどの問題も生じるであろうが、「黄金時代 (歴史)」「戦国時代 (歴史)」「通奏低音 (音楽)」などのように、第一の意味が、カッコ内に記した分野で用いる専門的なものであり、第二の意味が「転義」「比喩的」などとして、専門性を離れ

た意味になる場合には、両者の差が大きく、まぎらわしさの度合いは低くなる。

以上の語に対して、たとえば「前もって準備する」という一般的な意味と法律用語としての意味とをもつ「事前準備」のような四字漢語の場合、二つの意味に派生関係があるとも断定しにくく、「①前もって準備すること。②〔法〕刑事訴訟上、迅速な審理のために第1回公判期日前に訴訟関係人が証拠の収集・整理を行うこと。」(『広辞苑』)というように、番号を使って意味の区別を行うといった方法がとられる。同様の例としては、

意思表示 (法律) 異国趣味 (芸術) 依存関係 (論理学) 拒否反応 (医療) 緊急事態 (政治) 生活空間 (心理) 中央機関 (政治) 背信行為 (法律)

などがある。これらの場合、一般的な意味しかないのであれば、二字漢語の意味から四字の場合の意味も、おおよそ想定できるので、見出し語とする必要もない。しかし、同時に専門的な意味も存在し、位相的な違いが、二つの意味の間に存在することを周知する必要から、このような四字漢語も登録対象となってくる。「情報提供」という語を例にすると、『広辞苑』は、政府が自発的に情報を公開する意の法律関係の語としてのみ、これを説明するが、この語には、「視聴者からの情報提供」のような一般的な使い方も見られる。一般的な意味のほうは説明するまでもないと考え、専門的な意味のみを記述するという方法があることを示すものとして、『広辞苑』の扱いを解釈することも可能である(一般的な使い方については、把握していなかったという可能性も否定しきることはできない)。

また、以上は、一応、専門的な意味と一般的な意味の区別が、比較的、容易なケースであったが、「方向転換」のような場合は、「向きをかえること」も「方針をかえること」も、特定の分野で用いられる専門的なことばとは断定しにくく、いずれも一般的な意味ということで解釈する。以上のように、多義が認められる場合、意味のあり方がいくらか複雑になるため、その四字漢語は説明する必要のある語として、立項の候補となりうる。

#### 3.1.1.4 関連語との区別。上位語と下位語

ある二字漢語の意味について、それを下位分類する必要がでてきた場合、種差を示す二字漢語を前部分に用いて、四字漢語をつくることがある。たとえば、体温に着目して動物を分類すると「恒温動物・変温動物」のような区別が生まれ、手段に着目して労働を分類すると「精神労働・肉体労働」の区別が生まれるというようなケースである。類例は、以下のとおりである。

医療被曝 (公衆被曝・職業被曝) 音声言語 (文字言語) 合成繊維 (化学繊維) 固定電話 (携帯電話) 自然科学 (社会科学・人文科学) 実践哲学 (理論哲学) 商事会社 (民事会社) 中間階級 (有産階級・無産階級)

専門的な語である場合が多いが、これらの場合、専門語に見られる、意味が二字漢語の単なる組み合わせでは理解しにくいということに加えて、関連する語もあわせて理解すべきであるという点が特徴的である。なお、「人と人とを会わせること」を意味する「紹介」において、「他者」という要素は重要であり、他者同士でなく自分について他者に話をする「自己紹介」は、個々の二字漢語の意味から考えれば、理解しにくい部分を有する語だといえる。「一種の紹介」として、二字漢語の「紹介」に対して、四字漢語が下位語に相当するとも考えられるものの、「紹介」が本来の意味からずれており、上述の「音声言語」「肉体労働」などの例とは区別される。「母子家庭」も、「家庭」の定義に「夫婦」が含まれて

いるのが、本来的であるとするならば、そこからやや意味のずれた使い方ということになるゆえ、やはり四字漢語全体の意味を説明しないと、理解が困難な語だと見なしうる。「紹介」や「家庭」の定義に「他者」「夫婦」という要素を含めずに説明する方法もありうるが、抽象的な定義になるおそれも否定できない。単純に後部分の二字漢語に対して、四字漢語全体が下位概念を表すとはしにくい点で注意がいるケースである。

以上は、二字漢語が上位語であり、それを構成要素としてもつ四字漢語が下位語を表す場合であったが、具体的な事柄を表すさまざまな語に対して、四字漢語がそれらの総称として用いられる場合というのものもある。たとえば、「皮膚感覚」が「温覚」や「触覚」「痛覚」など、個々の感覚の総称であるようなものであり、以下の類例が考えられる。

火山活動（噴火、噴気 etc.） 広告媒体（テレビ、新聞、看板 etc.） 交通機関（鉄道、船舶 etc.） 舞台装置（大道具、照明 etc.）

「舞台装置」は、「演劇などの効果を高めるために、舞台に装置するもの。大道具・小道具など」（『岩波国語辞典 第7版 新版』。以下『岩国』）などと定義される。意味を記した部分については、二字漢語の意味から、おおよそ察しがつくものの、「～など」で示される部分については、知らなかったり理解が不十分であったりすることもあるので、具体例が提示されることによって、当該の四字漢語が、どのような語をまとめて言い表すための語であるのかが、明確に把握されるようになる。

以上、成句的な語、固有名詞に近い語、専門的な語、上位語・下位語など関連語との区別が必要な語などについては、単なる二字漢語の意味の組み合わせよりも、特別な点が認められ、辞書に立項されることとなる。

### 3.2.2 意味の限定

以上、3.2.1では、一般語ではなく専門語であることや、ほかの四字漢語との関係性などの観点から、辞書に登録されやすい語かどうかを眺めたが、以下では、四字漢語そのものの意味・用法の観点から、見出し語になりやすい語と、そうでないものの比較を行っていく。専門語かいなかの区別は設けずに検討するので、一部3.2.1と重複する語も含まれる。なお、以下で語例として示す四字漢語のうち、資料とした国語辞典で見出し語になっていないものについては、脇にアスタリスクを付することとする。

まず、造語の観点から見ていく。「中間小説」「低回趣味」など、使用され始めた時期や使った人物が明確で、一般に定着したような語は、辞書に意味とともに記述される。文芸雑誌では、辞書にのことは、ほとんどないであろうが、「公開化粧\*」「電車化粧\*」などの臨時的な語が出現することがある。これは、「電車内で化粧をする」ことを一語化した表現であるが、言い得て妙といった印象とともに、笑いを生み出す効果がある。

四字漢語に比喩が関わる場合としては、「爆弾のようにインパクトのある発言」を意味する「爆弾発言」のようなものがあり、「爆弾」と「発言」そのものの意味からは、たとえば働いているかどうか予想しにくいので、一般に用いられるようなものは、登録の必要がある。「企業戦士」「人間模様」なども下線部の本来の意味からずれており、立項する辞書が見られる。政治などの話題で聞かれる「岩盤規制\*」（岩盤のような規制）のように、新たな表現も生み出される可能性がある。「自動車王国\*」「サッカー王国\*」の「王国」など、複数の語で比喩的な意味が共通して用いられる場合には、「ある方面で大きな勢力をもつ

て栄えている国家・地域や団体などをたとえていう」（『大辞林』）のように、原義とは別に、一つの意味をたてて説明されるが、「爆弾—」「一模様」など、類例にとぼしい場合には、四字全体で個別に意味・用法を記述せざるをえない。

副詞的に用いられる「実際問題」のように、四字漢語の品詞性が構成要素の意味から予想しにくい場合はまれであるが（「実際」は副詞だが「問題」は名詞であり、「実際問題が」「実際問題を」のように名詞として用いられることが期待される）、後部分の二字漢語の表す意味的なカテゴリーに、限定やずれが見られる場合がある。たとえば、「監督」は動作の意味でも人の意味でも用いられるが、「映画監督」といった場合は、後者の意味に限られる。類例に以下のものがある。

科学万能（効能があること→考え方） 願望充足（満たすこと→精神の傾向） 近所迷惑（迷惑な様子→そのような行為） 高校野球（スポーツの一種→試合・大会）

また、四字漢語の表す意味が、二字漢語の組み合わせから予想されるものよりも、限定が加わっている場合があるので、以下で、その点について考察を加える。

### 3.2.2.1 主体の限定

安定成長（国の経済） 延長保育（保育所・幼稚園） 解散命令（裁判所） 高度成長（〈日本〉経済） 児童虐待（保護者） 就職活動（特に大学生） 世論調査（個人でなく公的機関など）

たとえば、「保育」単独であれば、動作の主体は親や保育所・保育士などであるが、「延長保育」の場合は、親は主体ではないというように、動作主体の面で限定がある。「意見交換\*」「完全決着\*」など、多くの四字漢語には、このような限定は見られないので、個々の二字漢語の意味を理解していれば十分ということになる。

### 3.2.2.2 対象の限定

移動撮影（カメラ） 横断歩道（車道） 危険思想（国家・社会に対して） 禁断症状（薬物など） 政略結婚（子女）

細かく考えれば、歩行者が横断するのは「車道」であるというような点は、「横断」と「歩道」を組み合わせただけでは出てこない意味であり、対象について限定が加わっていると考えられる。以上には、一応、主体か対象かが、比較的わかりやすいものをあげたが、そのいずれにも限定が認められる場合がある。「口述筆記」という場合、「Aが口述してBが筆記する」としたのでは、内容がそれぞれ別である解釈も考えられるが、「Aが口述して、その内容をBが筆記する」のように、対象の面でも限定されていると考えたい。次のようなものも、複数の動作の参加者が想定される。

修学旅行（引率者と児童・生徒。前者が後者を連れて旅行すること）

同伴出勤（水商売の人間とその客。前者が後者を連れて出勤すること）

参加者の関係が複雑であり、これらの語になじみのない人にとっては、辞書で定義されていたほうが助かる類の語である。

### 3.2.2.3 その他

主体や対象の限定のほかには、次のようなものがあげられる。

[時間・時代]

時代小説 (明治以前の時代) 戦争文学 (近代・現代の戦争) 天気予報 (当日から 3 日以内の天気) 不在証明 (犯罪が起こったときに現場にいないこと)

[場所]

救命胴衣 (海など) 経済特区 (中国) 公衆電話・公衆便所 (利用しやすい場所)  
集中豪雨 (狭い地域) 地球環境 (表層) 転地療養 (気候のよい場所) 人間関係 (社会・組織の中) 養護教諭 (小学校・中学校・高等学校)

いつでも、どこでもよいというわけではなく、カッコの中に示したような時間や場所に限定して用いられる。

[目的]

暗証番号 (ATMなどに使う番号) 乾布摩擦 (健康) 記者会見 (重要情報の提供)  
区画整理 (都市計画) 国民投票 (国政の重要な事項) 総量規制 (環境保全)

これらに加えて、「懐中電灯」(乾電池)のように「手段」が限定されるもの、「単独行動」(他人と無関係)のように「条件」が限定的なもの、「長編小説」(複雑な構成)のように「内容」が限定されるものなどがある。

以上のように、主体、対象、場所など、四字漢語の表す意味にかかわるいずれかの要素に限定が見られる、つまり単なる二字漢語と二字漢語の足し算では、四字漢語全体の意味が十分に理解されにくいような語の場合には、国語辞典の見出し語となりやすい。辞書にまったくのっていない四字漢語、あるいは用例としてのみ記載されている四字漢語の中にも、以上のような意味の限定が見られるものが存在する可能性は十分あり、見出し語の候補として、採集・検討が必要である。なお、ここでは、候補とすべき語の特徴として、どんな点を注意すればよいのかを示すために、多めに用例と個別の説明を加えることにしたので、やや記述がこまごまとしたものになった嫌いがある。

### 3.2.3 名詞間に見られる意味的な特徴

次に、名詞と名詞の間に想定される意味的な特徴の類型について考える。「有名女優\*」「意見交換\*」のように、形容詞的な二字漢語や動詞的な二字漢語を含む四字漢語では、「有名な女優」「意見を交換する」のように、二字漢語の品詞性をもとにして、二字漢語同士の関係を容易にひきだせる場合が少なくない。これに対して、名詞と名詞が結合した四字漢語の場合、前部分の二字漢語と後部分の二字漢語の関係が多様になる。たとえば、「雑誌」が後部分にくる点で共通していても、「科学雑誌\*」と「少女雑誌\*」では、前者が「科学に関する雑誌」であるのに対して、後者は「少女のための雑誌」というように、意味的な関係は異なる。『岩国』の付録にある「語構成概説」では、このような点に配慮しており、名詞+名詞の複合名詞を12の主要タイプにわけて提示している。以下の表4には、『岩国』のあげる類型と語例をすべて掲げる。表の右側には、文芸雑誌に出現した名詞+名詞の四字漢語について、国語辞典の見出し語にあるものと、ないものとに区別し、数と語例を記した。合計で596語をここでは扱っている。

表 4 名詞＋名詞の四字漢語において、前部分と後部分の間に見られる意味的特徴

	複合名詞の類型	『岩国』の語例	見出し語	語例	非見出し語	語例
1	A デアル B	父親 桜花 宝石 前提条件	24	有閑夫人	103	悪人芸者
	A ニユカリノアル B	ローマ字 西洋半紙 胡蝶	0		0	
2	ソノ B ヲ A ト呼ブ B	月組 富士山 第二工場	0		0	
3	A ニ属スル B	人手 星影 橋脚 原子核	4	陸軍軍人	40	惑星表面
	A ニ属スル、B ニ似タモノ	手首	0		0	
4	A ヲ所有スル B	船宿 金主	2	傷痕軍人	1	知識青年
5	A ニ関スル B	姉むこ 葉桜 印刷局 光量 自由主義 自動車工場 犯罪事例 科学雑誌 経営理念	60	文芸雑誌	179	石油工場
6	A ニ形状ガ似タ B	弓なり 花笠 さおばかり 鈴蘭 殿様がえる 板ガラス 鉄腕 銀世界	0		1	幼児体型
7	所 A ニ実現スル B	野ばら しりだこ 西風 町工場 テーブルスピーチ 露天ぶろ 遠洋漁業 国家理念	51	海上都市	41	地下迷路
	時 A ニ実現スル B	朝日 年男 古人 未来社会	3	近代社会	24	未来都市
8	A ノ存在ヲ特色トスル所 B	砂浜 雨空 氷原	5	格差社会	6	住宅地域
	A ノ存在ヲ特色トスル時 B	月夜 厄年 戦時	0		0	
9	A ノタメニ使ウ B	荷車 雨具 計算機 少女雑誌	14	映画音楽	16	体育施設
10	A ヲ材料トシテ作ッタ B	絹糸 しの笛 ゴムまり ガラス板 鉄橋 丸木舟 羊皮紙 玉子どうふ			1	金属製品
11	A ノ利用ヲ特色トスル B	かざぐるま 帆船 蒸気機関 電子顕微鏡 手まくら 足わざ	7	電子辞書	13	電気気球
12	A ガ原因デ生ジル B	ペンだこ 鉛毒 電光	0		1	工業排水

いくつか、『岩国』の語例から逸脱する可能性があるものについて説明する。3の「Aニ属スルB」について、『岩国』があげるのは、「人手」や「橋脚」など、人やモノの一部がBである場合だが、本稿では「陸軍軍人」や「米軍兵士\*」など「Aニ所属スルB」のように所属関係で結ばれる場合もここに含めた。8についても、『岩国』のあげる「砂浜」「氷原」などに対して、「格差社会\*」などは抽象的な語であり、拡大解釈のおそれもあるが、「格差の存在を特色とする社会」というように解釈することも可能と考え、ここに含めた。このようなものを上記の12タイプに含めないとした場合、主要な類型でカバーできないものが多くなってしまっているので、それをさげたいと考えたためである。『岩国』が「漢語の複合語は和語系のもとの一律には扱い難いが、以下ではなるべく併せて説く」とするようにより、6など、四字漢語に適当な例があまり見当たらないようなタイプもある。数が多いのは、5や7であり、これらの場合は、辞書にのっていないような語であっても、解釈は容易であることが多い。ただし、5の場合を例にすると、「交通事故」のように「交通に関する事故」よりも詳細な定義が求められる語や、「野球選手」など「特殊でなくても、

使用頻度の高いもの」(『学研国語大辞典 第2版』の付録「語彙について」から)は辞書にのることになる。

表について考えると、たとえばある型に関して、「見出し語 (100 語)、非見出し語 (0 語)」のような場合があれば、その型の四字漢語は特別な意味をもつ場合が多いことがうかがえ、また反対に「見出し語 (0 語)、非見出し語 (100 語)」のような場合があれば、その型では説明するまでもない四字漢語がもっぱらつくられているというような指摘が可能であるが、本稿で用いた程度の用例数では、そのような顕著な傾向は、いずれについても見られない。ただし、辞書にのっていない非見出し語として分類される四字漢語には、5や1, 3, 7のものが多く、ふだん私たちが目にする名詞+名詞の四字漢語において、辞書にのっていないだろうと感じられるものの中には、これらの型に属するものが多いであろうとの推測は許されるであろう。

なお、たとえば不動産に関連して、「(～駅から) 徒歩物件\*」という語が用いられることがあるが、この言い方に違和感があるとすれば、「徒歩で行ける (行く) 物件」のように、この語は解釈され、表4にあるような、一般的な関係がそこに見られないためだろう。文脈が与えられれば、四字漢語の意味の理解に、困難はほとんどない。こういう語の場合は、意味が特殊であるというよりも、名詞を並べただけの、ていねいさの足りない表現として認識され、辞書の見出し語になる可能性はきわめて低い。

#### 4. おわりに

以上、本稿では、辞書の見出し語になりやすいか、なりにくいかという点から、現代日本語の四字漢語について検討してきた。ここで指摘したいくつかの要因は、国語辞典の編集に携わる立場の人にしてみれば、公にすることはなくとも、実際の編集において、ある語を見出し語にするかしないかの判断基準として、利用されていたものである可能性は十分あるだろう。しかし、それ以外の一般の人にとっては、どのような四字漢語が辞書にのり、どのようなものが除外されているのかは明らかなことであるとはいいがたく、そのことに鑑みれば、ここで行った分析にも、なにがしかの意義があると思う。

名詞+名詞の四字漢語について、『岩国』を参考に語例を提示したが、名詞については、人を表す名詞や、場所を表す名詞といった観点からの分類も可能である。それらの名詞が結合して、表4に見たようなパターンの四字漢語となるにあたって、どのような意味的な制限があるのかという点を考える必要があるが、これについては別稿にゆずる。

#### 参考文献

- 石井正彦 (2013) 「臨時的な四字漢語の形成」『現代日本漢語の探究』東京堂出版  
 沖森卓也・木村義之・田中牧郎・陳力衛・前田直子 (2011) 『図解日本の語彙』三省堂  
 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房

- 島村直己・鶴岡昭夫・正保 勇（編）（2004）『国立国語研究所の語彙調査 資料集』国立国語研究所
- 朱 京偉（2011）「蘭学資料の四字漢語についての考察—語構成パターンと語基の性質を中心に—」『国立国語研究所論集』2
- 朱 京偉（2013）「日本語の造語力としての和製漢語」『レキシコンフォーラム』6
- 中川秀太（2014）「接尾辞的な一字漢語と類義の二字漢語における造語機能の比較」『レキシコンフォーラム』7（刊行予定）
- 野村雅昭（1975）「四字漢語の構造」『電子計算機による国語研究Ⅶ』秀英出版
- 野村雅昭（1987）「複合漢語の構造」『朝倉日本語新講座1 文字・表記と語構成』朝倉書店
- 宮島達夫（1994）『語彙論研究』むぎ書房
- 村木新次郎（1989）「現代日本語における分析的表現」『国文学解釈と鑑賞』54-7
- 村木新次郎（2012）『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房
- 山下喜代（2008）『日本語教育のための合成語のデータベース構築とその分析』平成17年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究C
- 山田孝雄（1940）『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館
- ゆもとしょうなん（1979）「あわせ名詞の構造—n + nのタイプの和語名詞のばあい」『言語の研究』むぎ書房

## 注

- 1 引用元の文章は、宮島達夫氏によって1959年に書かれた「調査単位の条件」によるものだが、この文章ののった書籍・雑誌の確認がとれなかったため、上記のような提示のしかたをとったことを断っておく。

Received date : May, 7, 2014

Revision received date : June, 11, 2014

Accepted date : July, 2, 2014